

令和元年6月13日現在

機関番号：14601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07241

研究課題名(和文)日本人青年による自殺の心理的メカニズムおよびその抑制要因の実証的解明

研究課題名(英文)The psychological mechanism of the suicide among Japanese adolescence

研究代表者

石井 僚 (Ishii, Ryo)

奈良教育大学・学校教育講座・特任准教授

研究者番号：50804572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本人青年の自殺の心理的メカニズムについて、死後の未来展望に焦点を当てて検討することであった。大学生を対象とした質問紙調査およびVRを用いた実験室実験を行い、日本人青年に特有の死後の未来展望の様相およびその様相と自殺リスクとの関連を検討した。その結果、日本人青年に特有の死後の未来展望として、死後に過度な期待を抱く展望の存在が示され、そうした展望と自殺のリスク要因との関連が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人青年の自殺率が他先進諸国と比較して高いという現状に対して、そのメカニズムの一端を死後の未来展望という側面から明らかにしたことに社会的意義がある。また、これまで自殺等と関連する要因として海外で着目されてきた死後の未来展望について、海外で使用されている尺度の翻訳も行った上で、日本人青年に特有の様相を明らかにし、日本人青年版の尺度を作成した点に学術的意義がある。本研究の基礎的知見は、今後の研究や介入の際の視点になると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to reveal the mechanism of Japanese adolescent suicide in terms of transcendental time perspective. To investigate the appearance of Japanese adolescent transcendental time perspective and its influence on suicidal risk factor, questionnaire surveys and experiment using virtual reality were conducted to Japanese undergraduates. The results showed that Japanese adolescents can have an overexpectation to after death and it can be related to suicidal risk.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：自殺 青年期

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の年間自殺者数は、ここ 20 年近く 2 万 5 千人を超え続けており、これは交通事故死者数の 5 倍以上にも相当する (警察庁, 2015)。さらに日本人青年の自殺率は先進諸国の中で極めて高い水準にある (WHO, 2016)。日本人青年による自殺率が高いという統計は、日本という文化の青年期という発達段階に特有の、自殺の心理的メカニズムを示唆している。青年の自殺は、我が国の精神保健領域における最重要課題の 1 つであり、日本人青年に特有の自殺の心理的メカニズムの解明、有効な予防方法の開発が急務である。

一見不合理な自殺という現象は、死後の未来展望を持つことによって、その個人にとって合理的に行われているとされる (Boyd & Zimbardo, 1997)。Boyd & Zimbardo (1997) は、そうした死後の未来展望が宗教の影響を多分に受けることを示しているが、強い宗教信仰のない日本人青年 (e.g. 岩井, 2004) の死後の未来展望には大きな個人差が予想される。青年期は時間的展望の獲得期であり、時間的展望は、青年期の発達課題であるアイデンティティ形成 (Erikson, 1963) の基礎とされる (都筑, 1993)。青年期発達との関連も想定される死後の未来展望に焦点を当て、自殺との関係性を実証的に検討していくことが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人青年の自殺の心理的メカニズムについて、以下 2 つの観点から実証的に検討することである。

(1) 日本人青年が持つ死後の未来展望の様相

強い宗教信仰を持たない日本人青年は (e.g. 岩井, 2004)、他先進諸国とは異なる死後の未来展望を持つ可能性が考えられる。したがって、海外で使用されている尺度の邦訳版ではなく、日本人青年の死後の未来展望の様相をボトムアップに調査し、測定尺度を作成する。

(2) 日本人青年の死後の未来展望と自殺との関連

上記 (1) で把握した日本人青年の死後の未来展望と、自殺との関連について検討を行う。具体的には、自殺のリスク要因との関連について、質問紙調査および実験室実験によって検討する。

3. 研究の方法

(1) 日本人青年が持つ死後の未来展望の様相

大学生 95 名 (男性 34 名, 女性 61 名, 平均年齢 19.74 歳) を対象に質問紙調査を行った。「死後には、どのような未来があると思いますか」および「死後の時間に対して、期待や希望、あるいは恐れを抱くことがあるとすれば、それはどのようなことですか」という 2 つの問いに対する回答を、自由記述形式で求めた。

(2) 日本人青年の死後の未来展望と自殺との関連

尺度作成および自殺に対する態度との関連の検討: 大学生 225 名 (男性 77 名, 女性 139 名, 性別不明 9 名, 平均年齢 20.14 歳) を対象に質問紙調査を行った。調査内容は、(1) の調査結果から作成した日本人青年の死後の未来展望を測定する 13 項目と、超越未来展望尺度の邦訳版 (Boyd & Zimbardo, 1997)、および自殺のリスク要因とされる自殺に対する態度尺度 (Batterham, 2013) の邦訳版であった。なお、超越未来展望尺度は、原著者の許可を得て翻訳を行った。

社会的排斥が抑うつに及ぼす影響への調整効果の検討: 大学生 50 名 (男性 15 名, 女性 35 名, 平均年齢 20.74 歳) を対象に、VR 環境で仮想の他者 2 人と簡単なキャッチボールを行うサイバーボール課題 (e.g. Venturini et al, 2016) を用いた実験を行った。実験参加者を、ボールが均等にパスされる受容群とボールが途中から一切パスされない排斥群 (各 25 名) に無作為に割り当てて実験を行った。サイバーボール課題の前に死後の未来展望、課題前後に自殺のリスク要因とされる抑うつ (文部科学省, 2009) を測定した。

4. 研究成果

(1) 日本人青年が持つ死後の未来展望の様相

2 問の質問に対する記述に関して、KJ 法 (川喜多, 1986) の手法を用いてカテゴリの生成と記述の分類を行った。その結果、超越未来の存在、否定的な超越未来、過度な超越未来への期待という 3 つの大カテゴリと、25 の小カテゴリが生成された。日本人青年は、死後の未来展望が存在するか否かについての考えに個人差がみられるほか、死後の未来に否定的な展望を持ったり、過度に期待する展望を持ったりすることが示された。

(2) 日本人青年の死後の未来展望と自殺との関連

尺度作成および自殺に対する態度との関連の検討: (1) の結果および因子分析の結果から、日本人青年の死後の未来展望を測定する日本語版超越未来展望尺度が作成された (表 1)。自殺に対する態度との関連を検討したところ、過度な超越未来への期待が高いほど、自殺に対して

表1 各尺度の項目内容

日本語版超越未来展望尺度

否定的な超越未来

- 死は次へのスタートだから楽しみ
- 死後の未来では、自分のしたいことが好きなようにできると思う
- 今生きている世界は通過点で、死後の世界が本当の世界である
- 死後には、生きている間には感じ取ることが難しかった幸福を実感できると思う
- 死後には、神仏といったより大きなものとのつながりを感じられると思う

超越未来の存在

- 死後の世界は信じていない
- 死後に未来があるようには思えない
- 来世があると思う
- 死後には、家族やまだ生きている人たちを見守ることができる

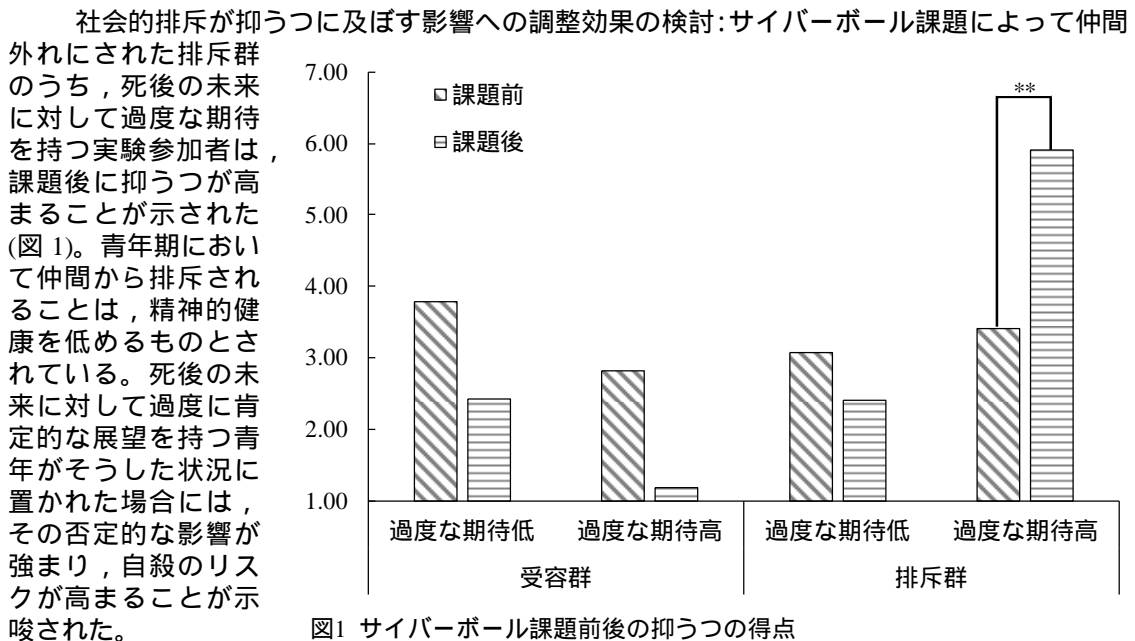
過度な超越未来への期待

- 生前の記憶や感情が死後になくなってしまうのはつらい
- 死後の未来では、今までの時間や思い出などが無くなってしまう恐怖感がある
- 死後の未来において、他の人たちとつながれるか不安に思う
- 死後数年経って、友達など周りにいた人に忘れられるのは嫌だ

(超越未来展望尺度の邦訳)

1. 死ぬのは肉体だけだろう
2. 私の身体は、本当の私の一時的な入れ物である
3. 死は新しい始まりである
4. 私は奇跡を信じている
5. 進化論は、人間がいかにしてできたかを適切に説明している
6. 人間は魂を持っている
7. 科学的な原則で、すべてを説明することはできない
8. 自分が死ぬときには、この世での自分の行いについての責任をとることになるだろう
9. 人間が生きていくための神の法則がある
10. 私は靈魂を信じる

肯定的であることが示された ($r = .31, p < .01$)。こうした結果は、海外での死後の未来展望を測定する超越未来展望尺度の邦訳版 (表 1) ではみられず ($r = .11, n.s.$)、日本人青年に特有の死後の未来への過度な期待という展望の在り方と、自殺との関連が示唆された。



(3) まとめ

本研究の結果、日本人青年に特有の死後の未来展望が明らかとなり、その中でも死後の未来に対する過度な期待が、日本人青年の自殺率を高める1要因となっている可能性が示唆された。今後は、その他の要因も考慮に入れながら、死後の未来展望に着目した自殺の予防方法について検討していくことが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

なし

〔学会発表〕(計 2 件)

- (1) 石井 僚・江 聚名・原田 雅也 (2019). 日本人青年の自殺リスクと死後の未来展望 VRを用いたサイバーボール課題による社会的排斥が抑うつに及ぼす影響への調整効果 発達心理学会第30回大会 早稲田大学.
- (2) Ishii, R., Harata, M., & Jiang, J. (2018). Constructing time after death among Japanese adolescents: Development of a Japanese version of a transcendental time perspective scale and an investigation of its validity. 2018 International Conference on Education, Psychology, and Learning, Sydney, Australia.

〔図書〕(計 0 件)

なし

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：原田 雅也・江 聚名

ローマ字氏名：HARATA Masaya, & JIANG Juming

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。